

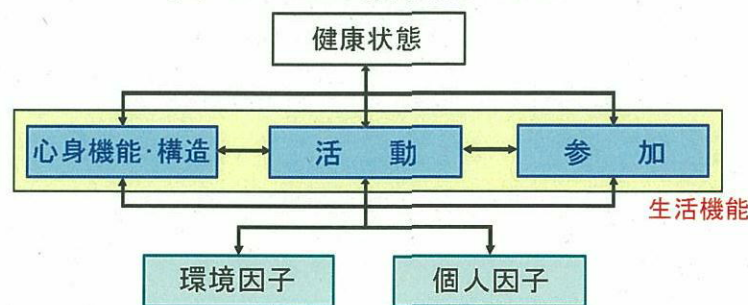
## 2. 「生きることの全体像」(1)：相互作用においてとらえる

ICF は、「生活機能」の分類と、それに影響する「背景因子」(「環境因子」、「個人因子」)の分類で構成される。

そして生活機能に影響するもう一つのものとして「健康状態」(ICD で分類)を加えたのが「生活機能モデル」(下図)である。

このような生活機能モデルとしてとらえることなしに、単なる分類として各項目をバラバラにみるだけではICFとしての意味はない。

図 ICFの生活機能モデル



### ○相互作用モデル：モデル図の矢印が大事

生活機能の3レベル(「心身機能・構造」：心身の働き、「活動」：生活行為、「参加」：家庭・社会への関与・役割)はそれぞれが単独に存在するのではなく、相互に影響を与え合い、また「健康状態」・「環境因子」・「個人因子」からも影響を受ける。これを示すためにICFのモデル図では、ほとんどすべての要素が双方向の矢印で結ばれている。これが「すべてがすべてと影響しあう」相互作用モデルである。

なお矢印の上下や左右という位置や向きには特に意味はない。

影響の仕方にはマイナスの影響もあればプラスの影響もある。たとえば、環境因子の例として、点字ブロックは目の不自由な人にとってはプラスの効果があっても、歩行困難のある人にはマイナスになることもある。

この影響の与え合いの内容・程度は一人ひとりの例で皆違うのであり、どの要素がどの要素にどう影響しているのかを具体的に捉えることが重要である。

以上は言い換えれば、モデルの「矢印が大事だ」ということである。

ただし、他の要素からの影響で全てが決まってしまうのではなく、各レベルには「相対的独立性」(参照：p3-8)があることも忘れてはならない。